

---

# 真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

龍崎竹虎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

### 【Nコード】

N8699Z

### 【作者名】

龍崎竹虎

### 【あらすじ】

ロシアクォーターで金髪が特徴の少年、南雲なぐもひたち月出はある日、義父に促され川神学園に編入することになった。

武神と謳われる川神百代が居るからと渋っていたが、義父の熱意に負けて渋々2-Fに編入する。

面倒くさがり屋だが根はお人好しなため受け入れられていく月出だが…？

金髪少年の明日はどっちだ！

ちなみに他のヒロインとフラグが立ちつつもヒロインは一貫して燕

予定。

台本形式になることもあるかもしれない……。

## 第0話 オリ主設定(前書き)

一度打ち切った過去があるので、今度こそちゃんと書きたいと思う  
今日この頃。

## 第0話 オリ主設定

「喧嘩っ早い奴って頭ん中どーなってんだあ？ ああメンドくせえ

……」

なくも  
南雲 月出 ひたち

CVイメージ 梶裕貴（『ロウきゅーぶ！』長谷川昴の声）

武士テーマ 「静」

身長 175センチ

血液型 AB型

誕生日 7月22日 かに座

一人称 俺

あだ名 ヒタチ 夜叉

武器 拳 日本刀（銘は水面月出）みなもひたち

職業 川神学園2-F 燕宅付近のアパートで1人住まい

家族 義父1人 義妹1人

好きな食べ物 松永納豆 白米

好きな飲み物 緑茶

趣味 オートバイでツーリング

特技 料理（プロ級）

大切なもの 家族

苦手なもの 面倒くさいものは全部

尊敬する人物 義父

必要以上には口を開かない寡黙で面倒くさがりな性格の少年。  
頭脳や知識が高いが競争は面倒くさいということで2-Fに編入する。

松永燕は6歳くらいの時から義父が松永久信の知り合いということ

で面識があり、向こうから興味を持たれていた。

ある意味幼馴染のような関係で、彼女に対しては自分の意見を通そうとする分、割と寛大にしている。

結果燕には懐かれていて、結構な頻度で振り回されることが多いが、特には気にしていない。

世の中を何処か冷めた眼差しで一線引いたところから見ている節がある。

他人とあまり関わろうとしないが、何処か人を惹きつける雰囲気を持つており、話しかけると大概はちゃんと答えるので、人に嫌われるような器ではない。

自由奔放でマイペースな性格であるが、他人に振り回されることが多々ある。それでも「メンドクせえ」の一言で終わらせるし、本当は案外お人好しかもしれない。

彼が12歳のころに両親が行方不明になり、父親の友人だった現在の義父の夫婦に息子として迎えられた過去を持つ。

ちなみに義母も中学3年生の時に死去している。ちなみに12歳になる義妹がおり、多少は可愛がっている。

父型の祖母がロシアハーフだったため、彼はクォーターである。小さいころから様々な武道を教え込まれており、剣道は我流で貫いてきた。

14歳のころに義父が打った日本刀、水面月出を授けられており、帯刀許可も特別で受けている。

が、「こんな物騒なものはあんまり持ち歩きたくねえ」とは本人談。刀を使う際は燕返しを得意とする。

徒手格闘バリ・トゥードの才能もあり、燕とよく鍛錬していたのでこちらも強い。ただ、燕同様に戦った回数は少なく、未知数なものでもある。

川神百代などに再三再四勝負を挑まれるが、「メンドクせえ」と一蹴するのが常である。

## 容姿のイメージ

白っぽいプラチナブロンドの髪で前髪は少しだけ長く目は隠れ気味。後ろ髪も男にしては長めだが、ブロンドが様になっている。

顔立ちは東洋系の作りだがパーツが整っている。瞳の色だけはクォーターの血が色濃く青色だが、前髪ですこし隠れている。

首に黒い革製のチョーカーをしており、トレードマークになっている。

着やせするタイプで、肌の色も白人系クォーターなので白っぽい。戦闘になると前髪はヘアピンでとめて分けるようにする。

## 第0話 オリ主設定（後書き）

主人公は実は良い人みたいな感じで書いていけたらなど。



## プロローグ 編入……だと？（前書き）

プロローグを更新します。

三人称で小説書くのが久しぶりすぎる件について。

## プロローグ 編入……だと？

ブロオオオオオ

愛知県の名古屋から東京都までを結ぶ東名高速の東京方面の道を猛スピードで飛ばす1台のオートバイがあった。

鮮やかなメタリックブルーの車体が日光を反射させ、金属特有の強烈な光を放っている。

そのバイクの搭乗者のまたヘルメットと上着の間からプラチナブロンドの髪が覗き、風に任せて自由に揺れている。

日本人離れた生まれつきらしい金髪はもちろん注目を浴びやすいもので、この絶妙なコントラストを醸し出す一人と一台はそれに例外なく一際視線を集めていた。

……のだが。どうもこの搭乗者が醸し出す雰囲気は“異常”であった。

遮光のバイザーから少しだけ伺うことのできるガラス細工を模したような青色の瞳は活気ややる気と言った光とは無縁なもので、むしろ無気力や不機嫌などのマイナスなものを感じさせる、無機質な死んだ目言える。

そんな目をした彼南雲月出は、予想通り不機嫌であった。

その原因は2週間前まで遡ったところにある……。

2週間前……。

「川神学園に編入しろ。なあ？」

いつもよりも1オクターブ程上の裏声のような声が出てしまったのは、月出自身も自覚していた。

自分が行くはずのない無縁な場所に行くように命ぜられたとき、人

はこんな声が出るんじゃないだろうか？

今の彼の姿は突然辞令を突き付けられたサラリーマンのようにも見えないことはない。

「どついうこつた父さん。なんで俺がああ、かの有名な超人学園に編入することになったんだよ？」

先程の間抜けな声とは違い、普段通りの冷めた声なのだが、何処か嫌味のように聞こえるあたり、彼は多少怒っているようだ。

「いや、別にすぐに行けと言ってるんじゃないよ……そこじゃねえよ。な  
んで行くことになったのかってことだろうが」鉄心先生に頼まれたんだ

“父さん”と呼ばれたダンディズムを体現したような肉付きの良いオールバックの男性は最初は静かに切り出したものの、途中で遮られて後はため息を吐いてから呆れたように言った。

ちなみにこの男性は月出の義父なのだが、まあこの話は別の機会に語るとしよう。

「鉄心の爺さんが？ そりやまたなんでだよ？」

先程から会話に登場している“鉄心”なる人物。

日本有数の武道流派、川神流を取り仕切る超人とも言える格闘家であり、彼の編入先と言われた川神学園の学長でもある川神鉄心という人物である。

月出は父からそう言われ、5年前に一度だけ会った、どこことなく隙のない老人の姿を脳裏に思い出す。

「鉄心さんのお孫さんの、百代さんが居ただろう？ 確かに腕が立つんだが、あの娘の場合強すぎて戦う衝動が抑えられないようですね。気軽に手合せできる人物を探しているらしいんだ」

“百代”という単語が出た時点で、月出の眉は面倒くさそうにひそ

められた。

川神百代が話題に上ったとき、自分にとって良い話が出たためしかなかったからだ。

「それで俺に白羽の矢が突き刺さったと？」

「いやその表現じゃ痛そうだよ……。まあ良いや。とりあえずしよ  
うゆうこと」

何処かで聞いたことのあるネタで返され、この場面での父親のセ  
ンを疑った月出だが、敢えて突っ込まないあたり彼なりの優しさ  
というものなのかもしれない。

「で、君はもちろん行ってくれるよね？」

ダンディさからかけ離れた満面の笑み。初老の男性特有の優しげで  
人好きのする笑みで父親は訊ねた。

「だが断る」

先程の満面の笑みのまま、父親の表情は液体窒素に漬けられたか  
ごとくフリーズした。

背中には冷や汗が滝のように流れている。

「頼むよお。2週間くらい時間あるからさあ」

「2週間もありや充分だ！ さっさと電話入れて断ってこい！」  
自然と月出の声も大きくなり始める。

「でも、松永のこの燕ちゃんももうじき川神学園に編入するら  
しいよ？」

先程まで不機嫌なオーラを全身で出していた月出が嘘のようにおと  
なしくなった。

その理由に一つ、彼は“松永燕”という人物に信頼を置いていたか  
らだ。

自分の幼いころから慣れ親しんだ女性で武道の腕も強く、自分が戦  
った中で認めることのできる存在。そんな燕が編入するならまあ百

代から受ける被害も減るだろうと踏んだのだ。

「それなら別に2週間後、受けてもいいぞ。燕が来るなら負担減りそうだし」

父親はフリーズから解き放たれ、再び笑顔をぱあつと輝かせる。

「君は本当に素直じゃないなあ。燕ちゃんが好きだからそんなに行きたくなかったのかい？」

息子の弱みらしい部分を発見したことを喜んだのであろう。

たがしかし、一般的にそれだけはやってはいけないということがある。

その内には月出をからかうということも含まれていた。

「じゃあまず2週間の期間の内に、あんたを甚振いたぶらないといけないな」

月出の笑みは、それはそれは、言ってることは真逆の、見る者を釘付けにさせるような素敵なものだった。

「なあ父さん。サファリパークのライオンゾーンに生肉のジャケツト着せて入れられるか、マグロ漁船に縛り付けられて遠洋漁業に出るか、どっちが良い？」

父親は本日二度目の冷や汗を流し謝罪したが、その数秒後、ダンディズムとはかけ離れた情けない悲鳴が上がったらしい。

……というようなりとりがあつたわけで、渋々ながら月出は新しい生活場所の神奈川県神奈川神市に向かったのだ。

あの後、結局彼のむしゃくしゃした心は少ししかおさまらず、周囲のドライバーたちを震え上がらせる今に至るわけだが……。

「お、次の出口で高速降りるか」

実はそれももう消えかけていた。

彼は新たな場所に、少し心を躍らせていたのだから……。

京都の某所

「????」月出君が居ないとつまんないよー!!!」  
「黒色のロングヘアをした美少女がそう叫んでいたんだとか。」

プロローグ 編入……だと？（後書き）

最後の人は分かりやすいですね。

というがこの回にも名前出てきてたし。

## 第1話 はじめての川神市（前書き）

午前中に半分くらい書いてたのに。

自動更新プログラムの所為で再起動 セッション復元したら全部消えてらゝ（＾o＾）ノオワタってなりました。

11時から6時くらいまで部活の掃除＋練習をして帰ってから続き書こうとわくわくしてたのになあ…。

しかし後悔先に立たず。まあ、新しい展開も思いついたし、ポジティブにアグレッシブに行くつもりです！



## 第1話 はじめての川神市

さて、あれから数十分オートバイを乗り回し、神奈川県にまでやってきた月出だった。が…。

現在の時刻は正午を回ったところで、鉄心に指定された時間 2 時にはまだ少し時間があつた。

よくよく考えてみれば2、3時間ほどオートバイに乗りっぱなしで、月出は昼食を摂っていなかったことに気が付いた。加えて腹の虫も控えめに鳴いている。

何か食べるかと思ひ立ち寄ったのが、神奈川県でも有数の名所七浜中華街である。

4月の2週目で尚且つ今日は金曜日で時間帯も昼間という中途半端な状況であつたから、この中華街もいつもと比べれば少し空いていた。た。

そんな中華街でとりあえずラーメンを空腹が満たされるまで食らつた月出は、次に自分の暮らす予定のアパートまでオートバイを走らせる。

特に特徴もない3階建てのアパートであるが、立地条件はそんなに悪くない。

川神学園までならそれこそ徒歩十数分で何とかなるほどの距離で、文句なしのアパートだった。

ただ家賃は割と良心的ではないものなので、父親からの仕送りを足してもまだ少し必要だ。

高校生がお金を貯める手段といえば、行きつく答えはただ一つ。アルバイトである。

まあこれは週末である明日か明後日にでも探せばいいという結論になつた。

ここまでで時刻はもうすぐ1時30分になろうとしていた。さすがに初っ端から遅刻というのは不味いと月出は考えたため、早々と愛車のメタリックブルーのオートバイのエンジンを吹かした。

キングクリームゾン！！

今、テンプレなものよりさらに上の段階に行くような設備の学長室で高そうなソファに腰かけていた。

「久しぶりじゃの、月出」

対面には川神学園学長で、月出をこの学園に呼び寄せた張本人である川神鉄心が同じようにソファに腰かけている。

先程はカンフー服のような服装をした「お前はブルー・リーか！？」と突っ込みたくなるような雰囲気 of 川神流師範代、ルー・イーが居たのだが、彼は月出を案内して早々に退室していった。よって現在は月出と鉄心の2人だけで話している。

「ああ、久しぶり。相変わらずだな、鉄心の爺さん」  
月出はというと、探るように鉄心を見据えていた。

「（5年前と本当に変わんねえよ鉄心の爺さん……。父さんに聞いた話だと「俺が生まれたときから変わってねえ」……。か。あながち間違いないじゃねえな）」  
父親が生まれたとき、要するに40年以上も前から変わっていないという事実には、表情には出していないが月出は少し引いていた。

「さて、本題に移ろうと思うのじゃが。お主の父親から話は聞いておるな？」

さっきまでの懐かしむような語り口ではなく、真剣そうな口調に変貌した鉄心。

「ああ。百代さんの相手ができる奴を探している。だったか」

「うむ。モモは史上でも最高と言えるほど素質があるんじゃないか……。どうしても強い者と戦いたいという欲が強すぎるようなんじゃない」。現役を引退したとは言え、それでも人類最強の部類に入る彼が眉を寄せて悩んでいるようだった。それを見て月出も割と深刻なことなのだろうと感じ取る。

「戦いたいという強い衝動は危険だもんな。あの人の場合は相当強い衝動なのだろう」

5年前一度戦ったときの奴の目を思い出すよ。と月出は付け足した。それに加え、今では彼女と互角に戦っていた揚羽さんも、高校卒業後は実家の九鬼財閥軍事部門のトップであるという。そんな立場上、もう百代と手合せする暇も簡単には作れないだろう。

そして武神と言われるあの川神百代だ。互角に戦える人類がこの地球上には一握りしかない。

月出の知る限りでは百代と同じ川神四天王の橘天衣に剣聖黨十一段の娘、あとは自分の最もよく知るところの武人である松永燕くらいだ。

「お主は5年前に一度、モモに勝っている。だから今回もその力を頼ってみたんじゃが……」

「ああ。そういうことならメンドクせえけど別に良いよ。まあ俺だって生身の人間だ。そんなに頻繁に相手は出来ないけどな。2週に1度くらいなら大丈夫だよ」

月出の答えを聞いて、鉄心は珍しく喜びを露わにした。

「そ、そうか、助かるぞい！ いや2週に1度で結構結構。むしろ十分すぎるくらいじゃ。これでモモの衝動も治まると良いんじゃないかなあ……」

「ま、やってみねえと分かんねえよ。じゃ、来週の月曜からで良いのか？」

「うむ。そうじゃな。もうお主の編入するクラスは2-Fに決めたからの。競争とかない方が気が楽じゃろう？ 朝は少し早目にまた

この部屋まで来るとよい」

そこまで配慮されていることに月出は若干驚き、感心した。

「そうだな。じゃあまた月曜日に頼むわ」

色々なことを話し込んでいたからか、もうすぐ4時を回ろうとしていた。

下校する生徒が帰り道をぞろぞろと歩くのを想像してメンドクせえと呟いた後、月出は足早に駐輪場まで向かった。

アパートにて…。

引越し屋から運び込まれた段ボール2箱と少し小さめの本棚、あとは帰りしに受け取ってきた制服などを整理していた。

すると不意に、見慣れた番号から着信が来たのを確認し、月出は2つ折り型で黒い薄型携帯電話を開いた。

「やつほー！ 燕だよー。月出君元気い！？」

天真爛漫というか元気洩刺とした幼馴染の声に、ローテンションが常の月出は少し顔をしかめる。

「いつもどおりだが。なんか用か？ 燕」

学年は燕のほうが上なのだが、燕は2月生まれで月出は同じ年の7月生まれ。実質半年くらいしか変わらないため、月出は燕に言われたこともあって呼び捨てで呼んでいる。

「うー。なんか素っ気ないなあ。愛しのお前が居なくて寂しいくらいは言つてよー」

この口ぶりからして月出は携帯電話越しでも燕が拗ねている様子を察知できた。

「からかうんじゃないよ。まあ燕も1か月くらいしたらこっち来るんだろ？」

「それでもやつぱり君が居ないとちよつぴしつまんないよー。放課後が少し暇じゃん」

京都に居たころは大概燕に何か付き合わされていたのが日常だった

ため、彼女にとってもそれがおそらく日常として定着していたのだろう。

「ま、メンドクせえけど別にメールや電話してくるくらいなら構わねえよ。バイト中はさすがに無理だがな…」

「（面倒くさいって言いつつもそういう風に優しくしてくれるところ、昔から変わらないなあ）じゃ、また追々メールするね！」

「おう、じゃあな。あ、燕」

「ん、何？」

「確かにお前のことは愛しいかもな」

そう言って月出は電話を切った。

そのころの燕…。

「え？ 最後、月出君はなんて言ったのかな？ 「お前のことは愛しいかも」って言ったよね？」

彼女の可愛らしい顔立ちに、いつの間にか朱色の気が差している。

ベッドに座りながら通話していたのだが、通話が終わるときの月出の一言が原因でベッドに倒れこみ、枕に顔を押し付け、足を左右交互にジタバタと動かして悶えた。

月出はいつも、あまり冗談を言わないのだが、意外と電話などでは冗談も言ってくる男だ。

そんなに簡単に信用してはいけない…のだろうが。今の燕は戸惑っていた。

「え？ ええ！？ これって喜んでいいのかな？ まあ、とりあえず1か月後に月出君に聞けば良いよね？」

松永燕という少女は、ある出来事から南雲月出という男に特別な感情を抱いていた。簡潔に言えば惚れていた。

今の彼女は、普段のように天真爛漫だが裏では何か考えを巡らせる武士娘ではなく完全に純粋な恋する乙女となっていたのだ…。

「待っててね、月出君」

彼女の心は語尾に音符やハートが付きそうなほどに踊っていた……。

「まあ、俺は冗談で愛しいとかいう人間じゃないと自負してるんだけどな……さあて、面接受けれる用に連絡入れないと」

燕との通話が終わった後、月出はバイト求人雑誌を一通り眺めてから何件か候補を絞ったようで、再び携帯電話を取り、とある寿司屋の電話番号を入力し始めた……。

## 第1話 はじめての川神市（後書き）

終わりがたビミヨいっ！

そして月出の一言に悶える燕さんマジ乙女。  
可愛くかけていたら…良いんだけどなあ…。

第2話 アルバイトの先輩、それは風の男!?(前書き)

燕さんが可愛くて生きるのがつらい。



## 第2話 アルバイトの先輩、それは風の男！？

さて、金曜日から1日飛んで、今日は週末の日曜日である。

土曜日に宅配寿司屋のアルバイトの面接に行った月出だが人手不足らしく、問答無用で即採用、日曜日の晩からでも入ってくれということだった。

店長の目は救世主を迎えるような感激の色が濃く映っていたという。それ以外に土曜日に特筆することも無いというわけで今日の日曜日である。

つつてもバイトまでは暇だよなあ……。と月出は思うのである。

まだ来て間もなく住み慣れない街という点以外は特にいつもと変わらない。

そう、この南雲月出は実に順応性の高い男であった。彼曰く、「幼いころから複雑な環境に放り込まれすぎた」とのこと。

……この男の場合は何が起こっても「メンドクせえ」の一言で済ますという点から、通常の間人よりも驚きという感性があまり仕事をしないのであるが…。

「最近はそんなに歩いてもないし散歩でもしながら、この土地のこと把握するのも良いか」

そう呟くと、彼は昨日の面接帰りに買ってきたジーンズに足を通し、財布と携帯電話だけを持って出かけた。

……またこの男は、考えたらすぐに行動に移す男であり“優柔不断”という言葉が逐一似合わない人間でもあった…。

彼はまず比較的家の近くにある仲見世通りなどを通ってみた。視界に入るのは大量の観光客たちが行き交いする道。

これを目にして彼は一言「メンドクせえ」と言った。

この場合、この観光客でこつた返す中に行くのが面倒くさいのか、この光景を目にして余計に無気力になったのか。いや、南雲月出という人間の場合はその両方を兼ねた意味で言ったのであるう…。

何とか人ごみを抜けて、今度は彼は河原にまでやってきた。

あまりがやがやとした賑やかな雰囲気が得意ではなかったから、むしろこういう懐かしい雰囲気の静かで落ち着いた場所というのが好ましいのである。

草の上にごろんと寝転がり、ふと地元の人に变态大橋と呼ばれている橋の周辺を見て彼は「あ」と何かに気付いたように、感嘆を漏らした。

彼の視線の先には、自分とおそらく同じくらいで日本人女性にしては高い175センチ、胸元には存在を強く主張する大きな2つの球体がある。

更には腰あたりまで伸びているであろう日光を浴びて優しい艶を出す黒髪までもがその女性の存在感を助長させる…。

月出はこの女性に見覚えがあった。というか、拳を交えたことすらあった。

彼女こそ彼が川神学園に編入する理由の大元である少女、先日再会した川神鉄心の頭を悩ませる孫娘、川神百代であった。

鉄心の話を聞く限り「彼女は戦いに飢えている」とのことだが、今の彼女は空手の胴着を着た武道家らしき人物と数メートル挟んで向かい合っている。

大方、鉄心への挑戦者がまず百代と手合せをして勝ってから来いと促されたのであろう。

武道家の表情は険しさと疑問が入り混じっており、何処か複雑そうに見える。

恐らく「川神鉄心はなぜこのような小娘と手合せさせたのだろうか？ 自分は愚弄されているのであるだろうか？」という疑問からである。

だが、手合せが始まった時、彼は真相を知った。

「では、行かせてもらおう！」

「来い！」

百代の表情は男とは対照的にワクワクとしたものであった。

男が拳を振りかぶると、百代はそれを軽々と避け…。

「川神流正拳突き！」

技名を叫び拳を突き出すと、挑戦者の男は天高く吹っ飛ばされていた。……おそらく星になったであろう。南無。

それを見るまでもないと言った様子で、彼女は詰まらなさそうに溜息をついた。

「はあ…。5年前のアイツみたいに、もっと私以上に強い奴とか居ないのかよー」

彼女の視線がこちらに向く前に、月出は足早にその場を去ったのだが…。

「おや？ あれは…。アイツと雰囲気は似ていたが、私の見間違いか…？」

彼女の眼はわずかだが、向こう側に消えた金髪が特徴の男 月出の背中を捉えていた…。

午後6時…。

あれから様々なところを回った月出は、確かに来た時よりもこの街のことを把握できるようになっていた。

昼飯などはまた七浜中華街で摂った。その際に金髪のアメリカーな雰囲気漂うメイドと黒髪のクールそうなメイドという対照的なコン

ピを見かけたが、やはり彼は気にする様子もなかった。  
家に一旦戻ってからバイクが入っている時間だったので、また支度をして店までバイクを飛ばし、今に至る。

「おお！ お前が新入りかあ〜！ あのオートバイすっげーかつこいいいな！」

イケメンだが何処か子供っぽそうな印象を与えるバンダナをした少年に声をかけられた。

「ありがとう。ところでアンタ、名前は？」

「おう、悪い悪い。風間翔一っていうんだ。そう言うお前は？」  
本当に風のような印象を受ける好青年である。

「俺は南雲月出。年は今年の7月で17だな。バイトでは風間のほうが先輩みたいだし好きに呼んでくれ」

「おお、俺と同じ年か！ じゃ、俺は月出って呼ぶぜ！ 俺のことも好きに呼んでくれて構わねえ。よろしくな！」

ニツコリと良い笑顔を浮かべた風間に釣られ、月出も珍しく口角を上げた。

「んじゃ俺も翔一って呼ぶわ。よろしく頼む」

「おい、風間君に南雲君！ そろそろ宅配に行ってくれ！」

「はーい！！！」

店長の声で我に返った2人はそれぞれの配送車まで走る。

まだ月出は、この風間翔一という男が近い内にもっと近い場所に居るとは予想し得なかった…。

「ふう…。ただいま」

時刻は午後11時。片づけの手伝いなど諸々を終わらせ部屋に戻った月出。その手には今日売れ残った寿司パックの入った袋が握られていた。

月出がこのバイトを選んだのはくいっぱぐれをしなさそうだったからだ。

今日もこうして晩飯を手に入れることができる。食糧には困らないし、給料ももらえる。一石二鳥だったのだ。

「さて、明日から学生だし、飯食って、シャワーしてから寝るかな……うげっ」

携帯を見て月出は珍しく苦悶の声を上げた。

不在着信が10件近く、メールもそれと同じくらいの量が受信されており、どちらも発信者が松永燕と表示されている……。

月出の米神辺りから一滴の冷や汗が流れ出た。

とりあえず謝らねばと携帯のアドレス帳から番号を選択し、通話ボタンを押す。

……と、僅かワンコールで燕が電話に出た。

「もしもし？ 月出君？」

その声は明らかに怒気を孕んでいるものである。

「あ、ああ。燕か？」

「うん、そうだよ。君に10回ほど電話とメールして、一度も反応してもらえなかった燕さんだよ」

10回という部分を強調しているあたり、かなりお冠のようだ。

「彼女とのデートは楽しかった？」

月出は一瞬、こいつは何を言っているんだ？ という表情になったが、誤解されていることに気付く。

「俺に彼女なんて端から居ないっての。電話やメールに反応できなかったのはバイトに出てて携帯を持つのを忘れてたんだよ」

「……ほんとに？」

やはり疑われる。

「本当だ。お前に嘘をついて一体全体何になるっつうんだ？」

「ん……」

唸っている燕に焦らされ、月出はある提案をした。

「お前がこつちに来たとき、何か一つ言うことを聞くから、それで手を打ってくれよ」

燕はそれを聞いて機嫌が良くなったようだ。

「じゃ、信じるから楽しみにしとくよっ！」

「お前はそうやって元気なほうが良いよ。じゃ、早めに寝るよ」

「うん、またね！」

電話が終わった後、日付が変わる前に寢床につくため、月出は寿司に手を付け始めた。

「働いた後の飯は旨い……」

まるで仕事帰りの初老のサラリーマンのようなセリフを言う月出。

これでビールが旨いと言っていれば、余計おっさん臭くなっていたことだろう……。

その後は予定通りシャワーを浴びてから日付の変わる1分前に寢息を立てた。

通話後の燕。

「うう……。日曜の夜だし、てつきり彼女とデートにでも行ってるのかと思ったよ……。でも月出君が嘘を言うとは思えないし……」

ここ数日の燕は彼女らしくなかった。もうそれは父親である久信が体調を崩しかけるくらいに。

「ま、良いや。代わりにデートできる口実ができたしね……えへっ」

すこし想像をしたようで、燕は赤くなりつつ微笑んだ。恋をすると人はここまでも買われるものなのだろうか……？

**第2話 アルバイトの先輩、それは風の男!?(後書き)**

燕さんのキャラが少し掴めないなあ…。

ふあ…ねむ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8699z/>

---

真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

2011年12月30日01時46分発行